鹿児島大学 男女共同参画推進センター
Newsletter

Vol.31
2022.3

編集・発行
国立大学法人鹿児島大学男女共同参画推進センター 〒890-8580 鹿児島市郡元1-21-24
TEL 099-285-3012　E-mail：gender@kuas.kagoshima-u.ac.jp　https://www.kagoshima-u.ac.jp/atsuhime/

■ご挨拶　男女共同参画推進センター副センター長　渡部 由香　（農学系　准教授）

新型コロナウイルス感染症変異株により令和３年度も生活の中に様々な制約を強いられてきました。その中で、参加や時間管理がし易くなったり、対面ではないものの意見交換ができたりすることで、リモート活用の生活様式が当たり前になりつつあります。そのような状況下、本学では、新型コロナウイルス感染症対応としてリモートワークを実施してきましたが、ライフワークバランスの充実を目的とした正式の働き方としてテレワークを３月１日から本格導入しました。また、意思決定機関への女性参画を目的に、本学の教育研究評議会に女性評議員枠を令和４年度から導入します。本学の男女共同参画推進センター設置から10年、まだまだ課題はたくさんありますが、男女共同参画及びダイバーシティ&インクルージョンへの本学の取り組みは着実に歩を重ねてきたと感じています。今後も、オール鹿大体制で、教職員や学生の幸福度アップにつながる取り組みをすすめていきます。引き続き、当センターへのご理解とご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

■学長と女性教職員との懇談会

佐野輝学長

越塩俊介理事

参加者

令和３年11月26日に、「意思決定機関への女性の参画について～本学の現状から見た意見交換」として、学長と女性研究者８名、事務系女性管理職５名との懇談会を開催しました。

はじめに、佐野輝学長から、女性教職員からの意見を聴く貴重な場として捉えているとの挨拶のあと、執行部において女性参画を促進させた等の紹介がありました。

参加者からは、女性がステップアップしやすい仕組み作りや人事評価の見直しについての提案、女性リーダー育成機会の提供やライフイベント期のサポート充実の必要性について意見が出されました。また、海外のような柔軟な働き方や研究専念できる環境の整備、研究者カップルの別居状態や分野によっては女性が少ない状況下での支えともなる女性同士のネットワークの必要性など、個々の事情に応じた切れ目のない支援の必要性について意見が出されました。また、管理職になるメリット等を女性に伝える機会の提供、女性自身が意思決定機関への参画に対して積極性な姿勢を示すことの必要性も意見として出されました。

懇談会には、馬場昌範研究担当理事、石窪奈穂美特命担当理事、田頭吉一事務局長等の参加もあり、女性の活躍への期待、個別に対する自由度とそれに対する組織のしなやかさ、誰もが働きたくなる職場環境作りの必要性なども語られました。

学長からは、女性の多い医学分野や留学経験から職場と家庭の意識改革が必要であることや今回は現場の生の声を聴くことで様々な考え方を受け止める機会となったこと、また、小１の壁等への保育支援も含めた大学として出来ることを着実に増やしていきたい、とのコメントがありました。

男女共同参画推進センター長である越塩俊介総務担当理事から、女性の参画を促進させ次のステージに繋げる貴重な機会となったこと、教職員の幸福度アップには女性の参画や多様性は必須であり、今回の意見等を踏まえて個別支援と全体対応を充実させていくとの閉会挨拶があり、意思決定機関への女性参画、ダイバーシティ＆インクルージョンの取り組みを一層推進する有用な機会となりました。

■女性リーダー育成セミナー

令和４年２月１日に、本学の事務系職員における管理的立場への女性の増加を目的に、令和３年度鹿児島大学女性リーダー育成セミナーを開催し、性別に関わらず各課から推薦された係長・主任等５１人が参加しました。セミナーでは、本学事務局長・副学長（財務・施設担当）の田頭吉一氏から、「リーダーの資質とそれを伸ばす努力について～それぞれの努力と職場の努力と～」の演題での講話と、農学部・共同獣医学部等事務部長の中村智子氏から「鹿児島大学でHATARAKU！」と題して経験談の披露がありました。

参加者アンケートでは、ロールモデルとしての話を聞く機会が少ないため、大学職員としての今後を考える大変良い機会だったとの感想が多くありました。また、田頭局長の「女性のキャリアを支えられる職場が誰でも働きやすい職場」との言葉から誰もが日々働きやすい環境を作っていけるよう考えることが大切だと感じたこと、中村部長の自分らしく生きることが大切にしていることとの言葉に仕事との向き合い方や管理職となることへの思いが参考になったなどがありました。

石窪奈穂美特命担当理事（広報・男女共同参画推進担当）からは、「参加者の意見やアンケート結果からも分かるように本学の管理的立場の女性はまだ少ない現状でありロールモデルを増やしていくことが求められている。性別に関わらず自分らしさを発揮できる環境整備として柔軟にライフワークバランスの働きかけをしていくとともに、女性の無意識のバイアスを払拭する意識改革の働きかけも更に工夫して継続していきたい」との来年度に向けたコメントがありました。

■学生への意識啓発：後期共通教育科目「身の周りの男女共同参画」

科目担当責任者　原田いづみ（法文学部教授、男女共同参画推進センター副センター長）

本講座は、共通教育センターの岩船昌起先生、グローバルセンターの森田豊子先生に共同担当になっていただき、約100名の受講生を対象に実施しました。

講座名に「身の周り」と入れたことが、学生に一番意識して欲しかったところです。男女共同参画社会が実現するためには、まずは身の周りから変えていかなければならないということを伝えたかったからです。

前半７回目までは、雇用、政治分野における男女格差、性的マイノリティの人権、学校におけるジェンダー問題、新型コロナ感染症による女性への影響といったテーマをとりあげ、途中グループ討議も入れつつ講義を行いました。講義後には、振り返り小レポートとして課題を提示し、提出してもらいました。

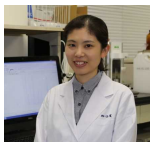
８回目以降は、より発展的なテーマとし、岩船先生に「災害対応における男女共同参画」、森田先生に「アジア・イスラーム社会における男女共同参画」をご担当いただき、グループ検討などを交えて、実践的な内容を展開していただきました。身の周りといっても物理的に近いところだけではなく、災害が起きたときには避難所が身の周りとなり、身の周りの延長として国際社会が位置しています。そういった広がりの意味合いも込めて、この分野の専門家である両先生にご担当いただきました。

そして、文字通り身の周りである地域における男女共同参画を考えてもらうために、鹿児島市、姶良市、志布志市の市役所男女共同参画担当課の職員から、各市の男女共同参画施策について報告していただきました。これらの回では、学生に能動的に地域の男女共同参画を考えてもらうために、予習でまずそれぞれの市の施策で注目すべきものを検討してもらい、授業中はそれに関するグループ検討、議論の結果を踏まえた考えなどを、振り返り小レポートの課題としました。

ジェンダーに関する話題は近年マスメディアで多く取り上げられ、知識がある学生も多いと思いますが、これをきちんと学び、「身の周りの自分に関係あることであると認識」する機会は少なかったのではないかと思います。この講座では、講義のほかにグループ検討、振り返り小レポート、まとめレポートを通じて、ジェンダー問題について毎週聴き、考え、話し、文章化することを学生は実践しました。この講座を受講した学生が、ジェンダーの視点を身につけ、ジェンダー問題を自分のこととして認識し、そして、今後男女共同参画社会実現のために活躍する人材となってくれることを期待しています。

■出前授業：高大連携

男女共同参画推進センターは、「研究者への道」（協力教員７人）、「理系の進路を考えよう」（協力教員10人）を提供しています。令和３年度の実施報告がありましたのでご紹介します。



「研究者への道」

担当者：加治屋勝子　（農学部　講師）
高校名　：曽於高校

いろいろな職業の方と話す機会があると視野が広がるため、大学の施設見学にとどまらず、実際に教員（研究者）の話を聞く機会をスケジュールに組むという配慮が曽於高校の先生方にあったことを大変素晴らしいと思いました。授業では、桜島大根等の研究に、生徒さんたちが目をキラキラさせて聞いてくれ、興味をもってもらえたと感じられたので私もやる気がでました。

世間一般的には、「大学の教員=研究者」という認識も薄いと思うので、一つのことを突き詰める面白さ、分からないことを自分の手で明らかにしていく楽しさ、見出した最先端のことを教育に活かしていく学びの深さについて、高校生に知ってほしいと思いました。いつもは研究の話ばかりですが、この授業では、自分の人生を振り返り、研究者へのキャリア、ライフイベント期と仕事との両立等の経験談をする機会でもありました。生徒さんたちへの進学や職業選択だけでなく、性別に関わらず自分の個性や能力を発揮し続けるという人生設計の参考にもなっていればいいなと思います。

12月16日　授業の様子

「理系の進路を考えよう」

担当者：楠本郁恵（医歯学総合研究科　助教）
高校名：修学館高校

「医学系の進路を希望している生徒さんたちに、理系の進路には様々な選択肢があることを伝えてほしい」とのことで、10月29日に「理系の進路を考えよう」をテーマに、私の研究内容も含めた60分の授業を感染対策としてオンラインで２回実施しました。参加してくれた生徒の様子も見せていただけて、彼らの反応を見ながら授業をすることができました。

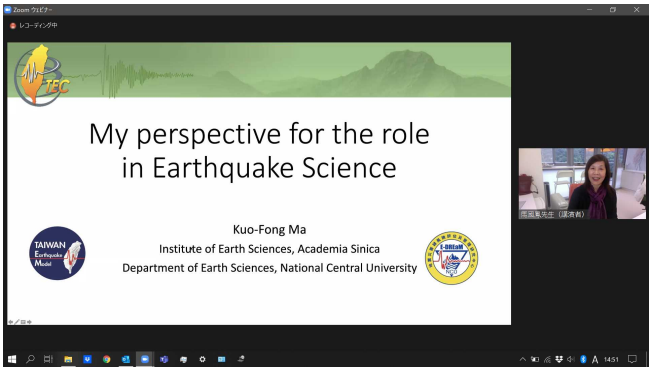
私自身の職業選択からの20年ほどの歴史と振り返って考えること、高校生だからと自信なく思っているかもしれないけれども、自分に湧き出る興味が尊いことを伝えるとともに、私の実験風景（動物の行動実験の準備）の動画を見てもらって、研究者の日常にも触れてもらいました。

感想を見ると、自分の興味を大切にしても大丈夫なことに反応してくれた生徒がいて、少しは思いが伝わったかなと思いました。また、授業中の生徒たちの反応を振り返ると、実験風景の動画は非常に興味を持って見てくれたのではないかと思っています。参加者から、脳の研究をしようと思ったきっかけを教えてほしいとの要望がありました。大学3年生頃のことを振り返り、就職氷河期であった時代背景が、大学院への進学を後押ししたことと、子どものころからの医学への興味が、医科学修士課程の存在に気づくことにつながり、「こころ」を知るための脳研究の面白さに引き寄せられていったと回答しました。高校生の頃には知らなかった世界が今後広がっているので、今自分の中にある興味や思いを大切にしつつ、達成や挫折を重ねながら、自分に合った生き方を模索していってもらいたいと思いました。

いずれの授業も、参加した高校生からは、「自分の興味や好きなことを大切にしたい」、「研究で社会貢献している研究者という仕事に興味を持った」、「進学の際の学部選択や将来設計にとても参考になった」などの感想がありました。男女共同参画推進センターは、来年度もこの２科目を提供していくこととしています。

鹿児島大学は「ダイバーシティ研究環境実現イシニアティブ（先端型）/令和２年度選定」の２年目に取組んでいます。新型コロナウイルス感染症により、予定していた海外派遣等事業は実施できませんでしたが、オンライン等を活用し、国際シンポジウムや研究スキルアップにつながる多様なセミナー等を実施しました。
事業の詳細は３月末に発行する事業報告書をご参照ください。

女性・若手研究者国際シンポジウム



3月2日、テキサス大学オースティン校の教授である鳥居啓子氏（専門：分子生物学）とAcademia Sinica、台湾国立中央大学の教授である馬國鳳氏（専門：地球科学）の国際的に活躍する卓越研究者2人を講演者に招聘し、「鹿児島大学 女性・若手研究者国際シンポジウム」を開催（英語での開催、同時通訳あり）しました。本学の郡山千早教授（医歯学総合研究科、WiSHワーキンググループ座長）が司会進行し、海外を含む学内外から75人が参加しました。
講演では、講演者ご自身の研究内容をはじめ、妊娠期・育児期の研究室の運営方法、研究ブレークスルーや所属機関の意思決定過程での女性の積極的な参画についての紹介がなされました。
参加者からは海外の女性研究者を取り巻く環境を知ることができ、研究者としてのキャリアプランやロールモデルの参考になった、国際的な研究活動への関心が高まったという声が聞かれ、ダイバーシティ研究環境の実現に向けた有意義なシンポジウムとなりました。
（実施担当：URAセンターより提供）

WiSH PLUSキャラバン

総務担当理事と学系長等が、女性研究者や若手研究者が研究へのエフォートを増やすことができるよう、ダイバーシティ研究環境整備に積極的に取り組んでいくことや、「WiSH PLUS]事業の数値目標に向けて、女性の採用促進、上位職への女性の登用等に係る人事計画等について懇談する機会とするもので、①女性の採用促進、上位職への女性の登用について、②WiSH PLUSの各種取組について、③その他男女共同参画・ダイバーシティ推進における執行部への要望等についての３つをテーマに、全15学系統とオンラインで開催しました。
公募をすべて女性限定で実施する学系があったほか、分野によっては全国的に取り合いになっている状況等から本学の取り組みや支援制度等のアピールの工夫の必要についての意見交換等がなされ、より積極的な女性の採用・登用等につながるよい機会となりました。

研究教授・研究准教授制度

将来有望な女性・若手研究者の研究の更なる推進とモチベーションの向上に繋げ、国内外の研究者の推進等を図ると共に、優れた研究力を有する研究者としての活躍を促進することを目的として、研究教授・研究准教授制度を創設しました。令和４年１月１日付で、２人の若手研究者（いずれも男性）に対し、研究准教授の称号を付与しました。

異分野融合研究プロジェクト創出研究助成事業

女性研究リーダー育成を行うことにより、海外との国際的な異分野融合研究へ発展させ業績評価につなげ上位職登用へ結び付けるため、スタートアップやステップアップの研究費を助成するもので、令和３年度は、女性枠に２人、若手枠に１人（男性）に支援しました。

女性・若手大型種目チャレンジ支援事業

将来性のある研究を行っている女性・若手研究者が積極的にチャレンジし、継続的な研究業績の蓄積により、研究力強化を図り、これらの経験から、海外研究機関への派遣、上位職登用に必要な業績評価や外部資金の獲得につなげるため研究費を助成するもので、令和３年度は女性枠、若手枠にそれぞれ１人ずつ支援しました。

その他、究力向上のためのスキルアップセミナーや女性研究者英語論文校正支援等を行ったほか、学外メンターからの科研費申請に係る指摘や助言により研究計画調書を支援する学外アドバイザー制度等も実施しました。新型コロナ感染症により、海外派遣や国際交流等の取り組みは実施できませんでしたが、国際共同研究への研究助成を行う国際共同研究促進事業を創設、スタートさせました。

鹿大の女性研究者に Close-up！

鹿児島大学は、女性研究者比率の増加を目標に掲げ、ダイバーシティ研究環境整備に取り組んでいます。本誌では、次世代へのロールモデルとして、また、今後の活躍に期待して、本学で研究している女性研究者を紹介しています。

片岡　美華　　准教授　法文教育学域教育学系（障害児教育学）

2006年3月　The University of Queensland Doctor of Philosophy- Special education修了・学位取得(P.h.D-教育学)
2005年9月～2007年3月　奈良佐保短期大学　非常勤講師
2006年4月～2007年3月　武庫川女子大学・同短期大学　非常勤講師
2007年4月～2009年3月　鹿児島大学教育学部　講師
2008年4月～2014年3月　鹿児島大学大学院教育学研究科　研究指導補助教員
2014年4月～　鹿児島大学大学院教育学研究科　研究指導教員
2009年4月～2015年3月　鹿児島大学教育学部　准教授
2015年4月～　鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系　准教授

■研究テーマについて教えてください。

現在の研究テーマは「発達障害のある人のセルフアドボカシー（自己権利擁護）」です。障害のある人がインクルーシブ社会で自立して生きていくときに、「〇〇はできるのですが、△△が難しいので助けてください！」と言えることが大切だと思っています。そのために自分で自分のできることや困難さがわかること（自己理解力）、人に助けを求めたり、必要なことを伝えていったりすること（提唱力）を身に着けられるよう、発達段階や障害特性に応じてどのように教育していけばいいかについて研究しています。また、受け止める側の障害理解もテーマに含めています。

Glasgowでの学会にて姉弟子との再会

■研究者を目指した理由、研究者としてのやりがいなどについて教えてください。

先生になりたくて入学した大学で、障害児教育と出会い、何もかもが初めてで新鮮でした。中には未だ解明されていないこともあり、5歳児のような「なぜ？どうして？」という疑問ばかりでした。それを少しでも解決したくて大学院に入り、そのまま研究者の道につながりました。修士課程の時に苦手な英語を克服するためにスクールインターンシップというプログラムでオーストラリアに行き、その後クィーンズランド大学の博士課程に入ることになりました。英語への苦手意識はなくなりませんが、度胸と友人を得ました。それらが研究にも生かされており、国際学会への参加が楽しみの一つです。

留学先のクィーンズランド大学（オーストラリア）

IASSIDD 2019 in Glasgowでのポスター発表の様子

■苦労話やその解決法などがあれば教えてください。

なかなか研究一筋とはいかず、自分の専門って何だろう？と自問しながら「障害と発達」をキーワードに保育園から大学まで出かけていき、対象児の実態把握や教員・保護者等への助言をしています。指導・支援には必ずしも答えがあるわけではないですが、相手の思いを想像し、理論と照らし合わせて多くの選択肢を示せるように努めています。ただ最近はつい自分の子どもや自分の姿と重ねてしまって「私もできてないんだけれどなあ」と歯切れの悪さを感じることもよくあります。

約4年間の育休からの復帰と同時に遠隔授業が始まったので、授業内容・方法のアップデートが大変でした。今も育児と仕事の両立に苦労しています。学内の支援制度や同僚の気遣いに感謝しつつも、急な対応にあたふたする日々です。

■日頃のモットーがあれば教えてください。

「やらずに後悔するよりもやってから後悔するほうがいい」迷ってばかりなのですが、最終的には「一度は経験！」とやってみるようにしています。

■これから研究者をめざそうとする方へのメッセージをお願いします。

研究者と言えども、研究以外の業務も含めていろいろなことが求められるようになっています。それを楽しむまではいかなくても、研究へのヒントとなることもあります。人生にムダはなし、と挑戦し、経験を積んでほしいと思います。また国際的なことにも目を向けて広い視野で柔軟に考えられる力が付くよう意識するとよいのではないでしょうか。

■学系の取組紹介

教育学系における男女共同参画推進への抱負

教育学系長　有倉　巳幸

教育学系は、令和４年２月１日現在、特任教員７名を含む教員数81名の教員中、女性教員は13名であり、その割合は16.0%となっています。年々その割合を鹿児島大学男女共同参画行動計画に掲げる目標値の23%に近づけていく必要がありますが、近年、転出・退職者が増え新規人事が滞っていたため、逆に割合が低下している状況です。こうした中、第４期中期目標期間中の人事方針が示されたこともあり、教育学系も新規採用者を増やす中で女性教員在職者比率を目標値に近づけるべく、行動計画を立案してきました。

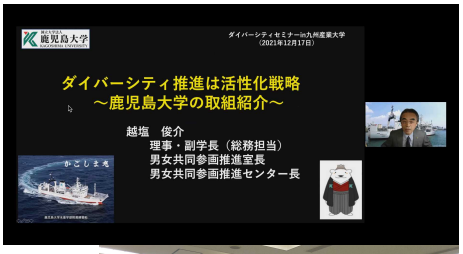
行動計画においては、本学系における採用の実態を調査し、女性研究者の応募が過去どれだけあったのかを調べ、その上で、女性が応募しやすい公募要件を考えたいと思います。産休や育休などの取得がキャリアに不利にならないことはもちろん、これらを取得しても望むようなキャリアを積めるよう、各種研修やサバティカルの機会を提供できる旨を公募要項に示したいと思います。

もっとも、こうした取組はどこの大学も行っていることであり、本学を選択し応募してもらうためには、多様なニーズにどれだけ寄り添えるかが課題だと考えています。例えば、管理職を目指す者もいれば、自分の専門分野を追究したい者もいると思います。しかし、心理的な安全を確保できない職場環境であると自身のニーズを表明できず、望むようなキャリアを積めなくなるかもしれません。

こうしたことから、教育学系長としてはどのスタッフも心理的な安全が確保できる職場環境を作り、その取組が認知されることを目指したいと思います。

■連携

学外：令和３年度九州産業大学ダイバーシティ講演会で越塩俊介理事・副学長（総務担当）が講演



令和３年12月17日に九州産業大学男女共同参画推進室が役員や学部長等の管理職を対象に開催した上記講演会で、本学越塩俊介理事・副学長（総務担当）がリモートで登壇し、「ダイバーシティ推進は活性化戦略～鹿児島大学の取組紹介～」と題して講演しました。

佐々木圭子九州産業大学男女共同参画推進室長からは、「参加者アンケートから、アンコンシャスバイアスについて「自分事」として捉えることの重要性やダイバーシティの意識を持つことの必要性の認識、女性研究者増に向けた公募時のプラスファクター方式等の導入や女性が活躍する環境作りの重要性、積極的な女性登用の必要性等の多くの気づきがあったようです」とのご報告がありました。

本学と九州産業大学は、九州・沖縄アイランド女性研究者支援ネットワーク（愛称Q-wea）参加機関同士であり、令和４年度には、Q-weaが継続している女性研究者支援シンポジウムが九州産業大学で開催される予定です。

＊写真は九州産業大学からの提供

学内：女性研究者・若手研究者支援制度説明会/医歯学総合研究科研究戦略会議

本説明会は年１回開催されており、本年度は令和４年１月25日に開催されました。男女共同参画推進センター副センター長の郡山千早教授（医歯学総合研究科）が男女共同参画推進センターの制度等を紹介しました。

説明会では、URAセンター、グローバルセンター、産学・地域共創センターの支援制度等の紹介もあり、大学の支援がまとめて知ることができるよい機会となっており、参加者からは支援制度を活用したいなどの感想があり有用な機会となりました。医歯学総合研究科研究戦略会議は、参加できなかった研究者がいることからオンデマンド配信（学内限定）もしています。

学内：「国立女性教育会館（NWEC）からの図書パッケージ利用図書展示・貸出」/附属図書館

附属図書館と連携し「鹿児島大学男女共同参画展」として関連図書や男女共同参画の取組紹介を年２回行っていますが、２回目は、10月から2月にかけてNWECの関連図書100冊と本学の関連図書を展示し、後期共通教育科目「身の周りの男女共同参画」の補助教材としても活用しました。

Information

令和4年度研究支援員制度利用募集中

令和4年3月14日(月)～4月15日(金)
配置期間:6月1日～9月30日
採用人数:20名程度(予定)

教員業務短期支援員制度やメンター制度も運用中です。
詳細は男女共同参画推進センターまでお問合せください。

男女共同参画推進センターは、郡元キャンパス事務局本部２階にあります。当センター扉は、自分事として捉えてもらえるよう男女共同参画やダイバーシティ等関連の情報を掲示している「学びの扉」です。その扉を開けると、皆様のキャリア継続やキャリアアップについて、ライフワークバランスに係る困り事、例えば育児休業等からの復帰後の制度等利用などの情報提供等に対応するスタッフがいます。

ライフワークバランスに係る困り事をどうすればいいのかな？どこに聞いたらよいのかな？と思ったら、まず当センターへご連絡ください。スタッフ一同お待ちしております。